

令和元年6月27日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01910

研究課題名(和文)ネパール社会における女性の社会参画とポジティブアクションの研究

研究課題名(英文) A Study of Positive Action and Women's Participation in All Aspects of Nepali Society

研究代表者

幅崎 麻紀子 (HABAZAKI, Makiko)

埼玉大学・研究機構・准教授

研究者番号：00401430

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究から、女性がポジティブアクションによって社会活動に参画し、公的なポストに就き収入を得ることは、中長期的には、家庭環境を変容し、妻・嫁・娘としての役割にも影響を及ぼしていることが、ネパール社会における事例より明らかになった。ポジティブアクションを導入することは、女性の社会活動への参画をもたらしたのみならず、その女性の社会参画の正当性を高め、当該社会の人々が抱くジェンダー観と女性役割の変容にも繋がっている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、ジェンダー格差是正のためのポジティブアクションの導入が、人々の価値観や生活にどのような影響をもたらしているかについて、ネパール社会を事例に捉えるものである。ポジティブアクションを批判する議論は少なからずあり、ポジティブアクションへの理解を得るためには、それがもたらすインパクトを学術的に分析し、丁寧にそれを議論する必要がある。ポジティブアクションを導入された地域の人々のローカルな視点に立ってその影響を分析することは、ポジティブアクションへの理解を醸成する上で、社会的にも学術的にも意義あることへと繋がる。

研究成果の概要(英文)： From this study in Nepal, women's taking public post by positive action leads to earning income, and in the medium- and long-term, changes the family relation and environment. It influences their roles as wife, daughter and daughter in family. Introduction of positive actions not only brings women's participation in social activities, but also increases the legitimacy of women's social participation, and leads to the transformation of gender perspective and women's roles held by the people.

研究分野：ジェンダー、文化人類学

キーワード：ポジティブアクション 女性の社会参画 家庭内役割の変容 ジェンダー観の変容 ネパール

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

女性の社会参画は、20世紀を通して西欧諸国を中心に各国で進んできた。今世紀に入る頃には、非西欧諸国においても、様々な公的分野に女性が参画しつつある。かつて労働の担い手でありながら私的空間のインフォーマルな労働に従事し、安価な賃金と保障のみを受けてきた女性たちが、国や地方自治体などの公的セクター、NPOや市民団体、企業にポストを得て活躍しつつある。その動きを後押ししたのが、クォータ制(民族や性別を基に一定数の比率をその属性を持つ人々に割り当てる制度)を始めとするジェンダー格差是正のためのポジティブアクションである。

西欧諸国では、長年続く女性運動を経て、女性の社会進出が徐々に進み、女性の社会参画だけでなく、ワーク・ライフ・バランス環境整備や意識啓発などの側面的支援策が導入されるなど、女性の社会参画を受容する価値観やライフスタイルがゆっくりと浸透している。一方、非西欧諸国では、ポジティブアクションの導入により、女性の社会参画が急速に進みつつある。ポジティブアクションへの社会的な理解を醸成するためには、それがもたらす社会への影響を把握する取組が求められている。

### 2. 研究の目的

ポジティブアクション(特にクォータ制)が導入され、女性の社会参画が急激に進んだ社会において、人々はポジティブアクションをどのように感じ、「伝統的な」男女の役割や価値観、ジェンダー観とどのように折り合いをつけて調整し、変革しようとするのであろうか。

ネパールでは2006年の内戦終結後、国家秩序の回復の上で、民主的な政治制度に則った国づくりの1つとして、クォータ制度を導入し、様々なセクターへの女性の参画が急速に進展した。急速にポジティブアクションにより女性の社会参画が進んだネパールにおいては、人々のジェンダーをめぐる価値観は一朝一夕では変化しているとは考えにくい。本研究は、このような問題意識に立って、ネパールを事例として、ポジティブアクションを契機とする急速な女性の社会参画とそのインパクトについて、人々のジェンダー認識の変化と日常的実践をもとに研究・分析するものである。

### 3. 研究の方法

本研究では、ネパールをフィールドとして、女性の社会参画、即ち女性が国会議員や役人・企業等で働くことと家庭生活を営むことの両立の実態、それを可能にする資源、ジェンダー役割やジェンダー観への影響などを、女性自身と家族への聞き取り調査と参与観察を研究方法として明らかにした。

特に、ネパールにおける女性の社会参画の現状とポジティブアクションの現状と認識について、政治セクター、行政セクター、教育セクター、医療セクターを中心に、文献資料収集とインタビュー調査を行い、半構造的インタビューを実施した。インフォーマントを得る上ではカースト、民族、地方/都市等の差異に留意するとともに、データの質を高めるため、複数回のインタビューを行った。また、できるだけ家庭を訪問し、家庭の状況を視覚的に把握するとともに、家族へのインタビューも行った。調査地は、カトマンズ市内、カトマンズ近郊、タライ地域の地方都市である。

### 4. 研究成果

質問票を用いて、社会参画を果たしている女性とその家族への聞き取り調査・参与観察を行った結果より、下記の点が浮かび上がってきた。

- (1) 政治セクターにおいては、ポジティブアクションがあったからこそ、国会という政治の場に参画できたことが明らかとなった。インフォーマントとなった女性達は、ポジティブアクション導入以前より、地域活動に興味を持ち、政治活動を行っていたが、ポジティブアクションがなければ、国会議員となる機会はなかったと考えていた。

政治活動を行う女性の中には、議員とはならず政党員として政治活動に従事している女性もいる。国会議員となっていない理由は、現時点での家庭環境に依拠しているからであり、将来的には、議員として活動する順番と時が来ることを述べていた。即ち、小さな子どもを抱える場合は、子育てと政治活動を両立するために、議員として活動することを選択せず、子どもが大きくなり議員活動と両立することが可能になったら、議員として活動するビジョンを持っていた。

ポジティブアクションの導入により、政治セクターに参画している女性達は、国会議員を将来ビジョンとして描くことができるようになったことに加え、子どもを育てるという役割を担いつつ、ライフイベントに応じた政治活動を行うことができるようになったこと、将来的に、議員となる順番や機会が巡ってくるという認識を持っていることが明らかとなった。

- (2) 行政セクター、教育セクター、医療セクターについても、政治セクター同様に、ポジティブアクションがあったからこそ、公務に就くことができたとの語りが多く見られた。インフォーマントとなった女性たちは、女性でありエスニックマイノリティでもあるなど、ポジティブアクションの対象となる複数の属性を持っていることが少なくない。いずれの属性によりポジティブアクションの権利を得るかについては、ジェンダーアイデンティティよりも

エスニックアイデンティティを優先させるケースが多く見られた。中には、ジェンダーに基づく属性を使用することに否定的な考えを持つ女性もいた。

また、ポジティブアクションの対象となる属性として、「民族」「女性」等があるものの、ポストによっては、民族に基づく優先枠のみが設けられ、ジェンダーに基づく優先枠が設けられていないこともわかった。

- (3) 首都圏と地方という視点からは、公的セクターにポジティブアクションが導入されている点は共通しているが、ポジティブアクションによる女性の社会参画をもたらす家庭役割への影響については差異が見られた。三世代同居型居住の多い地方部では、嫁・妻の社会参画を経済的にも家族を支える「仕事」として捉え、本人も家族も希望している。それゆえに、親世代が、嫁が社会参画を果たす以前に担っていた家事役割の一部を受け持つなど、家庭内での役割の変容が見られた。それは、「嫁としての役割」にも影響を及ぼしていた。しかしながら、ポジティブアクションが導入される前から行っている社会参画については、女性の家庭役割の変容は乏しく、伝統的に行われてきた家事労働を行うことが期待されていた。都市部の場合においては、仕事と家庭の両立を可能とする資源（保育園等）、女性の家庭での役割（子どもを持つ等）を遂行する上で役立つ資源として、高度生殖補助医療が普及・増加する中、それらの資源を利用しながら社会参画と家庭役割を両立する女性の姿が顕著であった。
- (4) 首都圏と地方という差異のみならず、民族による差異も見られた。すなわち、ヒンズー系住民とムスリム系住民が多いタライ地域（ネパール南部）では、社会参画へ関心を示す女性が他地域に比べると少なかった。家族も本人も、家事を行い、子どもを産み育てる役割を女性が持つとの意識が高く、ポジティブアクションについての理解や関心は低かった。
- (5) ポジティブアクションによってポストを取得した女性のいる家庭では、家事労働に関わる家屋内の設備にも変化が見られた。即ち、家を新築し、貯水槽を設け、最新設備のキッチンを設置するなど、水汲みや炊事・洗濯など、家事に費やす時間が明らかに減少している。それは、雇用期限が限定され給与水準も低かった就労の時にはみられなかった現象である。

本研究から、「妻としての役割」、「嫁としての役割」、「娘としての役割」への影響は一様ではないが、女性がポジティブアクションによって社会活動に参画し、公的なポストに就き収入を得ることは、中長期的には、家庭環境を変容し、妻・嫁・娘としての役割にも影響を及ぼしていることがわかった。そして、ポジティブアクションを導入することは、女性の社会活動への参画をもたらしたのみならず、その女性の社会参画の正当性を高め、当該社会の人々が抱くジェンダー観の変容にも影響を及ぼしていることが明らかとなった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 6 件)

幅崎麻紀子 「日本に住むネパール人の生活と現状」、多文化共生と教育を考える会 2018年

幅崎麻紀子 「夜間中学に通うネパール人生徒や在日外国人に対する理解に向けて」荒川区立第九中夜間学級校内研修 2018年

M.HABAZAKI 「Immigrant Children's and parents' praxis to adjust foreign school culture: A case study of Nepali Immigrants in Japan」, 39<sup>th</sup> Annual Conference of the International School Psychology Association, 2017

幅崎麻紀子 『子どもが2歳までは家で世話を』 - 現代ネパールにおける育児観 - , 国際ジェンダー学会 2017年大会, 2017年

幅崎麻紀子 「自分らしいライフプラン実現のために～転ばぬ先の人生設計～」, 青森県「20代を変えろ『生き方ナビ』」, 2017年

幅崎麻紀子 「女性の活躍」を推進するためには～WLB 施策の充実と女性上位職の育成に向けて～」, いばらきコープ女性幹部育成のための学習会, 2015年

幅崎麻紀子 「ワーク・ライフ・バランス～WLB マネジメントに向けて～」, 平成27年度農林水産関係中堅研究者研修, 2015年

幅崎麻紀子 「女性研究者の活躍と躍進」, 平成27年度農林水産関係研究リーダー研修, 2015年、

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：庄司 一子  
ローマ字氏名：SHOJI Ichiko  
所属研究機関名：筑波大学  
部局名：人間系  
職名：教授  
研究者番号（8桁）：40206264

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：  
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。